

四二 一新の明主・孝明天皇

蘇峰徳富猪一郎の『近世日本国民史』は全百巻ある。そのうち、第三十巻から六十一巻までが「孝明天皇」篇。計三十二巻である。四百字の原稿用紙にして約千六百枚というところか。

孝明天皇のご治世は弘化三年（一八四六）十六歳で踐祚されて以来、慶応二年十二月二十五日（陽暦慶応三年一月三十日）、万感のおん思いを若き親王（祐宮）さまにたくして崩御されるまで数えて二十一年。崩御の時宝算三十六。このあと、慶応三年の九一年をへて、四年（明治と改元するのは九月八日＝陽暦十月二十三日）のご一新、明治維新となる。おおよそ、この満二十年を、近代国家誕生のための陣痛期、激動幕末と呼んでおこう。そして二十年、日本民族の先頭に立っておられたのが孝明天皇である。ご歴代中、責任観念のもっとも強烈なおかたであった。その二十年をこの章九枚程度にちぢめる。

蘇峰は書いた。へ——孝明天皇には、祖考光格天皇の皇運挽回の御志をば、最も痛切に会



孝明天皇像

得、最も熱心に紹述あらせられた。而してその御一身を以て、国難に処せんとする御覚悟、御決心に至りては、宛も亀山天皇が、元寇の危機に際し、身を以て国難に代らんと遊ばされたと、其揆を一にした。この御誠意が、天人に貫徹して、遂ひに維新中興の祥運を導き来つた」と（前書第三十巻、彼理来航以前の形勢）。

さらに、第六十一巻、孝明天皇御宇終編では、へ——
癸丑、甲寅以来の歴史は、孝明天皇を擱きて、一頁をも記することは不可能である——略——この二十年間、内外の問題は乱れた麻のように、錯綜、混乱、ほとんどどこから手をつけたらいいのかわからないくらいであるのに、よくよくみると、こことくは京都を中心として発生、かつ、京都を中心として解決してないものはない。いいかえれば、すべての運動は天皇より……とまで書いている。癸丑、甲寅は、嘉永六年（一八五三）安政元年（一八五四）である。

踐祚七年目の嘉永六年六月三日、アメリカ大統領の国書をもった海軍大佐ペリーが、軍艦（黒船）四隻をひきいて浦賀に来航した。ちなみに、祐宮・睦仁親王（のちの明治天皇）はこの前年九月二

十二日(陽曆十一月三日)にご降誕。

アメリカの目的は通商条約を結ぶこと。遠洋漁業(捕鯨)の中継基地、大陸に市場を開拓するための基地としてである。が、日本は根本的には幕府の祖法である鎖国を守っていた。だから、「しかじかである。お帰り願いたい」

と断った。この時、ペリーが持参し、当時の幕閣首脳に宛てた書面がある。

「——ぜひとも通商を、というわけでもない。嫌なら砲弾をお見舞いして、お前達が天の理に背いている罪をただしてやる。だからお前達も日本の国法にそって防戦をしなさい。だが、必ずわれわれが勝ちます。その際、もし和平ということが欲しいなら、降伏しなさい。そして、今回我々がプレゼントしておいた白旗を立ててやってくることを」

というのである。日本は礼儀を重んずる国である。だから、古くから東海の君子国と呼ばれた。初めて他人さまの家を訪問するときは手ぶらでいかない。菓子折りの一つもぶらさげてゆく。引越しの折り、新居の近所、向う三軒両隣りへは蕎麦を配り、葉書の十枚ほどは持って挨拶にいった。もっとも今日ではこういう良き風習はすたれたが……。

「しかるに無礼者めッ」

温厚で鳴った老中首席(今なら総理)の阿部正弘もさすがに書面を叩きつけて憤った。

まことなき 夷の舟を 浦安の はやき沖手に 打ちかへさなむ

と詠んでいる。誠のない、邪惡な彼らを沖の方へおっ払いたい。だが日本にそんな力がないことはわかりすぎるほどわかっていた。力がないのは悲しいものである。阿部は涙を噛んだ。無礼な書面は「秘密外交文書」として幕府の蔵深くしまいこんだ。それでなくても、外国人の無礼者めッ、追っ払え、といきまいているサムライの多い日本なのだった。

このとき、ペリーの坐乗していた旗艦「サスケハナ」には当然のことながら星条旗がはためいていた。これが、この時より九十二年目の昭和二十年九月二日、また東京湾頭にはためく。大東亜戦争に日本が敗れ、ミズリー号上で調印式が行なわれたその日、同号檣頭に、九十二年前、彼らが桐喝外交で示したシンボルがかかげられたのである。このことは一体なにを物語っているのか……。どうも、「まことなき夷の舟」は、終始一貫していたらしい。翌安政元年、彼らは再び来航する。このとき、孝明天皇さまの改元の詔に、

「——洋夷出沒、辺海やすからず、いまだにやまず、つまびらかにおもう、咎を徴するに予一人に在り」という文字が見える。「徴する」は「ただしてみる」「問うてみる」であらう。その罪はすべて私にある、ということになる。昭和二十年の今上天皇もそう仰せられた。

安政五年六月、孝明天皇は伊勢神宮に勅使を遣わされ、宸筆の宣命(おことば)を付してこれを

奏せしめられた。大意は、

へ——嘉永以来外国人が来航する。なかでもアメリカはその首魁ともいうべく、表面はわが国に和親を請うようだが、実は併呑の心を蔵している。キリスト教の伝染も恐るべきものがある。が拒めば干戈(戦)に訴えると威嚇するので国家危急の時にのぞんでいる」と。

神々へのご祈願もそうだが、多くの御製・お言葉にも、一日として国家と国民のことをお思いでない日がない。

へ——永代安全、万民の娛樂ばかりを願ひ候こと、一身は如何やうになるとも頓着せざるのつもり

この春は 花鶯も 捨てにけり わがなすことは 国民のこと
様様に 泣きみ笑ひみ 語りあふも 国を思ひつ 民を思ふため
そしてよくきこえてゐる有名な御製、

矛とりて 守れ宮人 九重の 御階の桜 風そよぐなり

桜は日本である。対外国策の失敗によって一点、一画でも皇祖祖宗から伝統的にあいづぎ給える皇国の姿を、そのまま、百世、子孫に伝えたい、というご一念から出た絶唱であった。そのために、矛をとって日本を守れ、である。侵略ではなく、一もって貫く大和の国日本の真姿がここ

にある。

兄君がこう大御歌したまえば、妹宮和宮さまは、文久二年(一八六二)、十四代將軍家茂のところに降嫁されるに先だち、

惜しまじな 君と民との ためならば 身は武蔵野の 露と消ゆとも
とお歌いになるのだった。

上下、心をひとつにという。そのとき神風が吹く、と日本人は元寇以来信じた。この時も、在野の志士たちが猛奮起した。

いざ子ども 馬に鞍置け 九重の 御階の桜 散らぬそのまに
わが魂の 行方やいづこと 人間はば御階の下に ありと答えよ
九重の 御階の塵を 掃はむと 心も身をも うち砕きつる

一首目は肥後の宮部鼎蔵、池田屋に新撰組の急襲で自決。二首目は今村文吾のもので、文久三年の天忠組拳兵で斬罪となった畏友伴林光平の最期を悲しんで憤死したときの辞世。三首目は禁門の変で自決した久坂玄瑞の死をいたんだ三条実美の追悼歌。いずれも孝明天皇御製にお応えして詠んだ、としていい。

このように、幕末の志士たちは、斃れても斃れても、その白骨の道の上に、次々とおのれの白

骨をも敷いて悔いなかった。たおれてやむ、死してのちやむ、というのが相言葉ではあったが、実は斃^たれてやまぬ七生報国がその当時の志ある人々の心情であった。本書冒頭の神話についての章に「天の岩戸開き」のことにふれ、幕末の多くの事件も列記した。だが、いちいちの事件をみると、みんな失敗であった。しかし、その失敗の累積^{あきせき}の上に明治のご一新が来た。「天の岩戸」が開かれたのである。その維新の祭壇に捧げられたもっとも大きい犠牲が天皇の崩御であった。

最後に、『近世日本国民史』“孝明天皇御宇終篇”の一文を。

へ——家康、秀忠、家光等が、慶長、元和、寛永、正保の際において、朝廷に奉仕したところをもって、これを孝明天皇がそのご一代において幕府に対したもうた恩遇と比較してみるならば、朝廷の幕府よりお受けになられたところ甚だ薄く、朝廷の幕府に与えさせたもうた所の甚だ厚いことを感銘しなければならぬと。

さらに、

へいずれの時、いずれの代にも、我が朝廷は臣下に対して、いまだかつて小恩であらせられたることは無い。特に、孝明天皇の御代^{ごだい}において、もっともしかりとする。

孝明天皇がいられしやならなかったら、日本は幕末に減びていたろう。それは、次にくる明治、大正、昭和の天皇さまについてもおなじことがいえる。ご皇室と天皇なき日本は無い。

あとがき

『エピソードで綴る天皇さま―明治・大正・昭和篇―』の後篇として、歴史篇は予定されていた。前篇は近代の約百二十年。とすると後篇は神武以来だから二千六百四十五から引くことの百二十年で二千五百二十五年だ。二五二五、語呂合わせだとニコニコとなる。どころか四九八九、四苦八苦の難行苦行となった。二千五百二十五年分に神代の巻も加わる。それをおよそ四百枚でなんとかおさめようというのである。前篇にも書いたがこれまた前篇以上に無理といていい。数字ついでおことわりしておく。年齢はすべて教え年で通した。

枚数制限と先を急ぐの余り、とばしはしないが一刀両断、涙をふるって切ったところがある。また落としたところもあろう。しかし致し方あるまい。約二ヵ月で脱稿、痛感したのは、日本史の豊かさ、教えきれない人間群像の高さ、美しさ、面白さ、哀れさ、愚かさ、醜悪さ等々だ。

ところで、最終部分の幕末はたった九枚。かつて、嘉永六年から書き初め、慶応元年あたりで千三百枚に達し、中断した史伝が僕にはある。幕末、天忠組三総裁の一人、吉村虎太郎をめぐっ